

時間調査を用いたケアの国際比較

—UNRISDの報告書から—

阿部 彩

■ 要約

本稿は、国連社会開発研究所が行った7カ国（日本、アルゼンチン、インド、韓国、ニカラグア、南アフリカ、タンザニア）の時間調査の国際比較研究から得られる日本への示唆をまとめたものである。本分析から、女性のSNA活動の進出が、必ずしも、男性の拡張SNA活動（家事、ケア活動、コミュニティ活動）の進出を伴わないこと、日本の女性の拡張SNA活動に費やす時間は、経済発展のわりには長く、またその内訳をみると家事労働が長いことがわかった。ケア労働については、日本は他の6カ国に比べて、ケア従事率、従事している人のケア労働時間もさほど長くなく、発展途上国も含めた国際比較においては、病院や介護施設、保育所、教育機関などが、ある程度日本のケア労働を請け負っている様が垣間見られた。最後に、日本の男女の時間行動の最も特異な点は、SNA活動に従事している人の労働時間が突出して長いことが改めて確認された。

■ キーワード

ケア労働、国際比較、時間調査

1. はじめに

本稿は、国連社会開発研究所（United Nations Research Institute for Social Development、以下 UNRISD）のケアの社会経済（Political Economy of Care）プロジェクトにおいて行った時間調査の国際比較（Budlender 2008）のデータに基づいて、特に日本と他国との比較に焦点をあてた分析を行ったものである。Budlender（2008）では、プロジェクトに参加している7カ国のリサーチ・チームにUNRISDの担当研究者が共有の分析フレームワークを提示し、それに基づいて、各国のチームがそれぞれの国における時間調査（タイム・ユース・スタディ）の個票を用いて分析を行っている¹⁾。しかし、Budlender（2008）においては、日本の読者を想定していないため、日本と他国の差に特に着目する分析は少ない。そこで、本稿では、特

に、ケア労働における日本と他の6カ国の差に着目する。分析の着眼点は、日本の家庭内で行われるケア労働（育児＋介護）は他国におけるケア労働に比べて、それに費やす時間という観点からは、どのような特徴があるのか、また、ケア労働におけるジェンダー格差はどの国にも存在するものか、日本独自のジェンダー格差は存在するのか、という点である。なお、本稿におけるデータの使用および論文の執筆に関してはUNRISDおよびBudlender氏の許可を得ていることをここに付け加えておく。

2. 活動カテゴリー別にみた消費時間の分析

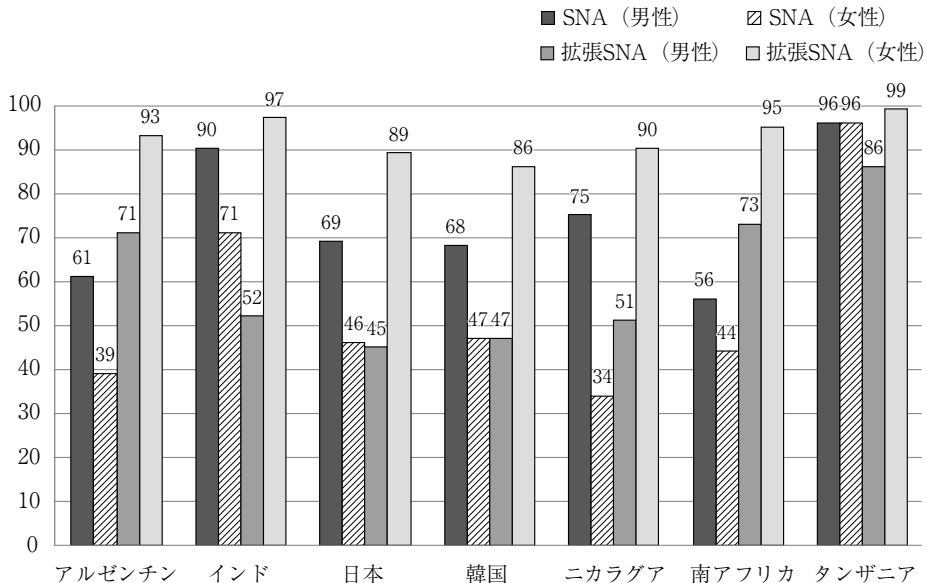
まず、最初にBudlender（2008）が行った分析は、個人が行う一日の活動を生産活動（SNA）、拡張的生産活動（拡張SNA）、および非生産的活動

の3つのカテゴリーに分けることである。ここでいう生産活動（以下、SNA）とは、労働市場における賃労働時間を始め、農作業なども含めたあらゆる経済活動を指す。タンザニア、インド、南アフリカでは、薪集め・水汲みなどの活動時間もSNAの一部と計上されている。拡張的生产活動（以下、拡張SNA）とは、直接的な経済活動ではないものの、それらを補完する家事労働や（家庭内）ケア労働が含まれる。本稿が最も着目するのはこの拡張SNAである。非生産活動とは、睡眠時間を始め余暇時間などの活動すべてが含まれる。1個人の一泊24時間（1,440分）は、SNA、拡張SNA、非生産活動のどれかにすべて費やされることとなる。分析対象は、15歳から64歳の男女である。

まず、これら3種類の活動への各国の男女の従事率を見たものが図1である。非生産活動は、すべての人が必ず従事しているので、すべての国・性別で100%となるため省略する。まず、男性のSNA活動の従事率（SNA活動に一日の一部の時間を費やしている人の割合）をみると、日本の男性

はインド、タンザニア²⁾などの発展途上国に比べると低いものの、南アフリカ、アルゼンチンよりも高く、中間的な位置に存在する。日本の男性のSNA従事率が約7割にとどまっている一つの理由は、15歳から64歳という分析対象においては若年層の多くが高等教育に携わっており、労働市場から離脱していることが挙げられよう。一方で、日本の男性の拡張SNA活動への従事率は7カ国中最も低い45%となっている。他の先進諸国に比べて、日本の男性の家事労働が少ないことは既知の事実であるが、アルゼンチンや南アフリカ、ニカラグアといった中進国、インドやタンザニアといった経済指標においては日本より低い国々との比較においても日本の男性の家事労働の参加が少ないことがわかる。

日本の女性については、タンザニア、インドに比べるとSNA活動への参加率は低いものの、ニカラグア、アルゼンチンに比べると高い。韓国、南アフリカとはほぼ同率である。タンザニア、インドにおいては主に女性が担っている水汲みや薪集



出所：Budlender 2008, Fig. 1

図1 国別、性別、活動カテゴリー別 従事率

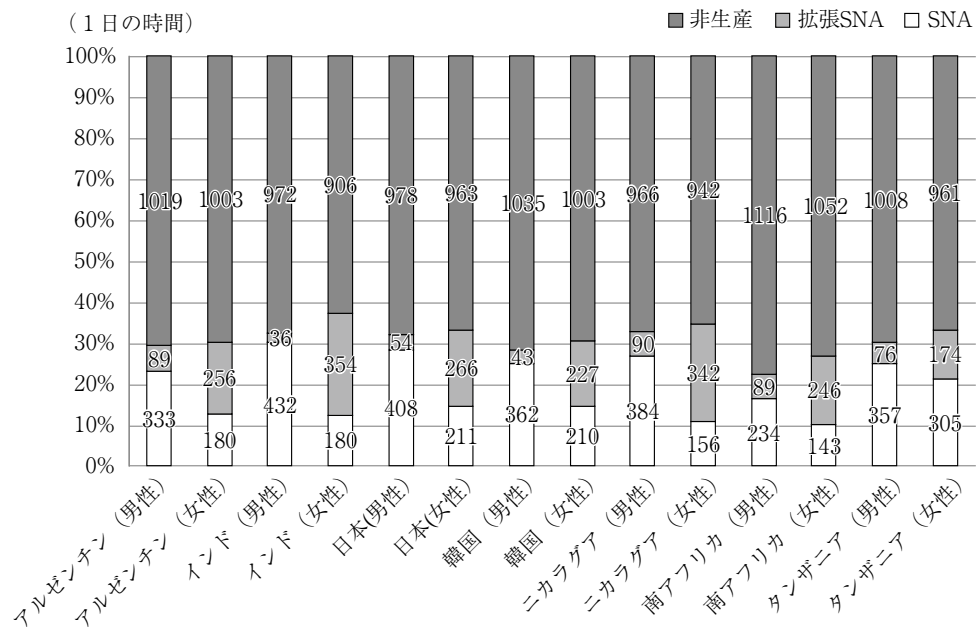
め、また、自給自足の農作業がSNA活動に含められているため、女性もSNA活動にかかわる率が高い。その他の国においては、主に労働市場における経済活動と考えられ、ニカラグア、アルゼンチンのラテン・アメリカの中進国は、日本、韓国、南アフリカに比べて女性の労働市場への参加が進んでいないことがわかる。一方、拡張SNA活動については、どの国の女性も高い率で参加しているが、日本の女性も89%とほぼ9割の該当年齢の女性が家事・育児・介護などの活動に従事している。

図1から示唆される興味深い点は、女性のSNA活動への進出度が高い国は、必ずしも、男性の拡張SNA活動の進出度が高いことを意味しないことである。例えば、ニカラグアとアルゼンチンは、女性のSNA従事率が日本、韓国よりも低い国であるが、どちらも、男性の拡張SNA活動の従事率が日本、韓国よりも高い。これは、ラテン・アメリカと、アジアという文化的な違いによるものかも

しれないが、その解釈は本稿にては保留する。

図1では、単に3つのカテゴリーの活動に一日のうちに従事する人の割合を見ているため、一日の内、その活動に費やす時間が10分であっても、3時間であっても、同様の扱いとなる。そこで、次に、これら3つのカテゴリーの活動に費やす平均活動時間(全サンプル)を見ることとする(図2)。図2は、すべてのサンプルの平均値であるので、その活動に従事していない人も、従事している人も含めた社会全体の平均値ということとなる。また、3つのカテゴリーともにすべての人をカウントしているため、3つのカテゴリーの平均値を合計すると24時間(1,440分)となる。

これによると、日本の男性はインドに続き7カ国中2番目にSNA活動に費やす時間が長い(平均408分³⁾)。これに拡張SNA活動の消費時間(54分)を加えると、日本の男性は、ほかの国の男性に比べて、最も非生産活動に費やす時間が少ないことが



出所：Budlender 2008, Fig. 2

図2 平均活動時間(総サンプル)：SNA, 拡張SNA, 非生産的活動

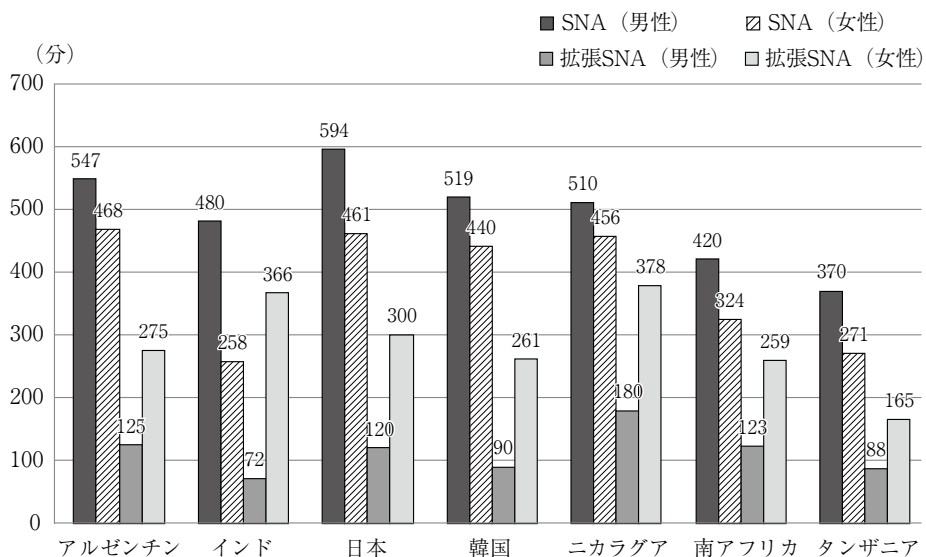
わかる（日本978分、インド972分）。7カ国のうち、男性の非生産活動時間が一番長い南アフリカに比べると（1,116分）、日本の男性は平均約2.3時間も非生産活動に費やす時間が少ないのである。一方、女性は、どの国においても、非生産活動に費やす時間が、男性に比べて少ない。しかし、日本の女性については、男女格差は比較的小さく（男女格差は15分）、男性に近い値となっている。ほかの国では、非生産活動の平均時間の男女格差が大きい国が多く、インド66分、南アフリカ64分、タンザニア47分、韓国32分）であった。結果として、日本の女性の非生産活動時間は、ほかの国の女性に比べて中間的な値となっている。

本稿の着目する拡張SNA活動については、発展途上国においても、先進諸国と同様にジェンダ格差が存在することが確認される。拡張SNA活動に費やす時間の平均値の男女格差は、最も大きいインドでは318分、次に大きいニカラグアでは252分であり、最も少ないタンザニアでも98分であ

る。日本の男女差は212分であり、7カ国の中では大きい部類に入る。拡張SNA活動に費やす時間の長さについては、インドの女性が354分、ニカラグアの女性が342分と最も長い、日本の女性も266分と比較的に長い。

しかし、図2は全サンプルにおける平均時間であるため、人口の年齢分布などが国ごとに大きく異なる場合には間違った印象を与える可能性がある。例えば、女性の人口の一部（例えば、子育て期の女性）の拡張SNA活動に費やす時間が他の国に比べて極端に長くても、そのほかの年齢層の女性（例えば、未婚女性など）が費やす時間が短い場合、その平均値をとると、中間的な値になる可能性もある。そこで、図3は、それぞれの活動に従事しているサンプル内の平均時間をみたものである。

まず、日本の特徴として挙げられるのは、男性も女性もSNA活動に従事している人々の活動時間が比較的に長いことである。男性では、594分と7



出所：Budlender 2008, Fig. 3

図3 平均活動時間（活動者のみ）：SNA, 拡張SNA, 非生産活動

カ国中一番長くなっており、図2に引き続き、ここでも男性の労働市場における勤務時間が長いことが確認される。興味深いのは、女性においても、SNA活動に従事している人の平均活動時間が461分とほぼ8時間（7.7時間）であり、従来の「男性はフルタイム、女性はパートタイム」という図式は、労働時間という観点からは当てはまらない。ただ、これは、あくまでも、SNA活動に従事する女性の平均労働時間なので、SNA活動に従事する女性の一部（フルタイムの）が男性と同じように10時間近い長い労働時間、その他の女性はパートタイムで比較的短い労働時間であることも考えられる。日本の女性に比べ、インド、タンザニア、南アフリカの女性はSNA活動に従事する割合が多いが、平均活動時間は短い。これらの国々においては、薪集め・水汲みなどの労働もSNA活動として数えられていることもあり、女性が、より「緩やかな」形でSNA活動に参加しているのに対し、日本、アルゼンチン、韓国、ニカラグアの女性はSNA活動の従事率は低いものの、より「インテンシブ」にSNA活動に従事しているといえよう。

拡張SNA活動については、それに従事している日本男性の平均活動時間は120分、日本女性は300分となっている。男性、女性ともに、ほかの国の同性に比べると、この値は特に多かったり、少なかったりということはない。ただし、男女格差については、インド（294分）、ニカラグア（198分）に続いて3番目に大きい（180分）。

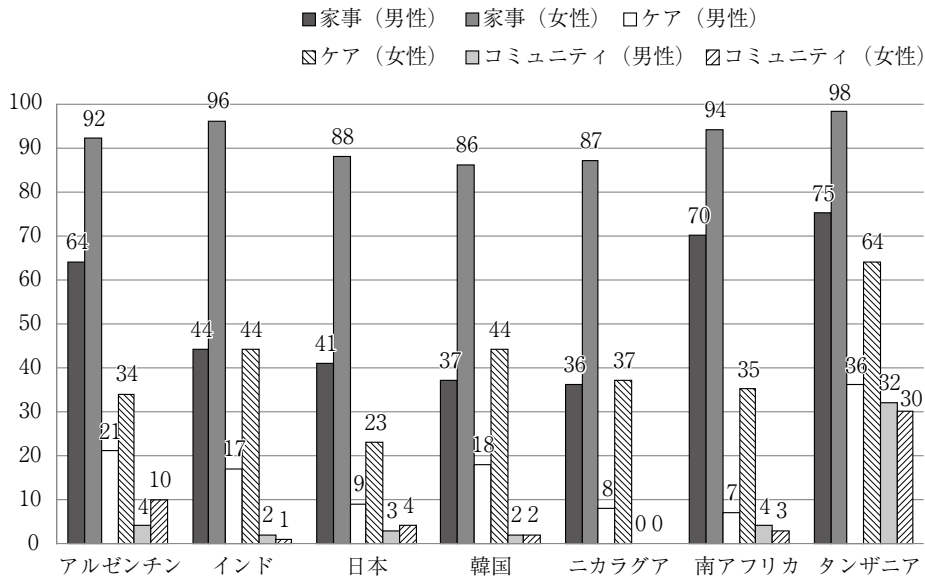
3. ケア労働に費やす時間の比較

上の分析では、一日の活動をSNA活動、拡張SNA活動、非生産的活動の3つに分けて分析を行った。本節では、拡張SNA活動を、さらに、家事（household maintenance）、世帯内の無償ケア労働、無償コミュニティー・サービスの3つの分類に分けた分析を行う。なお、本節においては、データ上可能である国（アルゼンチン、インド、南ア

リカ、タンザニア）においては、2つ以上の活動を同時に行うことも視野にいれた計算を用いる。この理由は、ケア労働は、子どもを背負いながらや、病人を見守りながら家事労働をするなど⁴⁾、ほかの労働と同時に行われる場合も多いと想定されるからである。日本を含む他の3カ国においては、同時活動を認めたデータがとられていないため、特にケア労働については、上記4カ国に比べて少なく記述されている可能性がある。

図4は、家事、無償ケア労働、無償コミュニティー・サービスの3つの活動の従事率である。図4から、まずわかることは、無償ケア労働については、日本の男女ともに7カ国中、従事率が少ないことである。高齢化などで、国民生活におけるケア労働の比重が高まっているとはいえ、実際にケア労働に従事しているのは女性では23%、男性では9%にしか過ぎない。同時活動の記録により単純比較が難しい4カ国を除いても、日本の女性は、韓国の女性（44%）、ニカラグアの女性（37%）に比べて、ケア労働に携わっている率が少ない。これは、一方で、日本においては高齢化が進展しているとはいえ、他方では、少子化・核家族化（i.e. 世帯人数の縮小）などの人口学的要因によって、世帯内のケアを必要とする人口が減少しており、また、同時に、病気や障害、老齢などに対する諸制度（例えば、完全看護の病院や、介護施設、障害者施設など）が発展してきたことによって、世帯内の一部のケアが外部化されていることなどにも左右されているであろう。

家事労働については、どの国においても女性の8割から9割が従事しており、どの国においても女性が家事労働から全く解放されることは稀である。男性については、家事労働に従事する割合は国によって大きく異なり、タンザニアの75%からニカラグアの36%まで約2倍の差がある。日本は、ニカラグア、韓国に続いて、男性の家事従事率が低い国である。



出所：Budlender 2008, Fig. 5

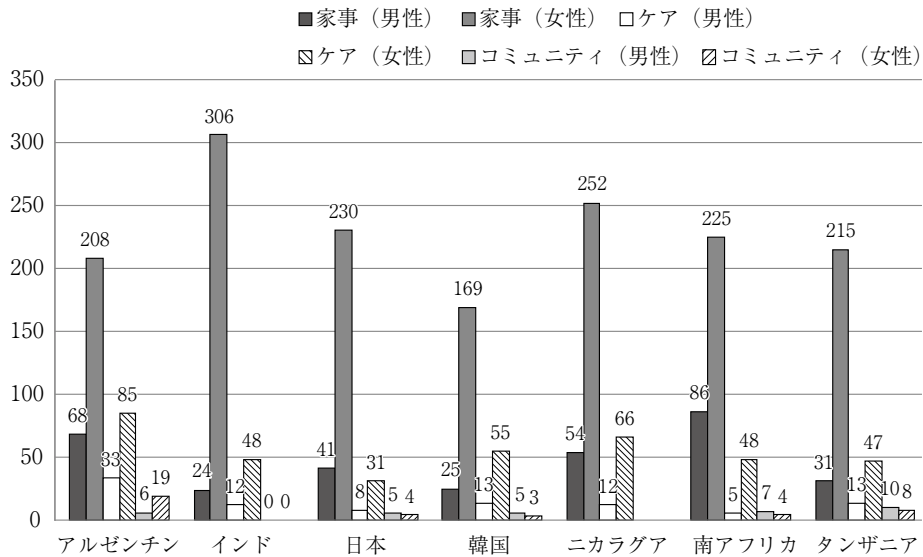
図4 従事率：家事，無償ケア労働，無償コミュニティ活動

無償コミュニティ活動については、タンザニアが突出して高いものの、そのほかの国ではごく一部の人々しか従事していない。日本では、男性3%、女性4%と、ほぼ同率の人々がこれに従事している。

図5は、これら3つの活動に費やす平均活動時間(全サンプル)を示している。全サンプルの平均活動時間は、従事率で見ると、男女格差をより明確に表す。そのため、どの国においても、家事労働、無償ケア労働における男女格差が顕著に表れている。日本について言えば、家事の平均時間の男女格差は189分、無償ケア労働では23分である。日本の家事労働時間の男女格差は、7カ国中3番目とほぼ中間、無償ケア労働時間の男女格差は一番小さい。しかし、男女間の格差の大きさは、その国における家事・無償ケア労働の性別分業の度合いのみならず、それぞれの国における家事・無償ケア労働の大きさに左右されるところも大きい。例えば、インドにおける無償ケア労働の男女

格差は36分と大きく、日本の男女格差23分を上回るものの、インドの男性は平均12分の無償ケア労働をしているのに対し、日本の男性は平均8分しかしていない。図4と同様に、図5においても、日本は、男女ともに、他の6カ国に比べ、無償ケア労働時間が少ないことが確認されるのである。また、家事の労働時間は、国によっても大きな差があり、インド女性の306分から、韓国女性の169分と2倍近い差がある。日本の女性の家事労働時間は230分と平均的である。無償ケア労働については、アルゼンチンの女性が最も長く従事しており85分となっている。日本の女性は、同性の中では、一番ケア時間が少なく31分であった。これは、日本の女性がケア労働に従事している割合が少ないことも(図5)影響していよう。

最後に、それぞれの活動に従事しているサンプルの中における平均活動時間を見てみよう(図6)。まず、図4や図5に比べ、どの国においても家事労働、無償ケア労働の男女格差が縮小する。こ



出所：Budlender 2008, Fig. 6

図5 平均活動時間（総サンプル）：家事，無償ケア労働，無償コミュニティ活動

れは、従事率における男女格差の影響が除かれるからである。しかし、実際に家事に従事する男女の間では、格差は縮小するものの、全くなくなるわけではない。

無償ケア労働については、アルゼンチンの女性が一番長く従事している。アルゼンチンは、女性のケア労働の従事率が比較的到低いものの（図4、34%）、従事している人の平均労働時間が長い（248分）。その逆のパターンがタンザニアの女性であり、従事率は64%と高いものの、平均労働時間は74分と一番少ない。日本の女性は、ケア労働の従事率が一番低く（図4、23%）、労働時間は中間的（134分）である。また、男女格差については、無償ケア労働に従事している男女においても、格差が生じているものの、日本の格差はそれほど大きいわけではない。

家事労働については、家事をしている女性の中では、日本の女性は比較的多くの時間を家事労働に費やしていることがわかる（7カ国中3番目）。

家事労働は、国の経済発展に伴って、洗濯（乾燥）機、掃除機などの家事の機械化や、調理済み食材が普及することによって、大きく縮小されると想定されたが、この7カ国に限ってみると、国の経済発展度と家事労働に費やす時間の関係は見ることができない。換言すると、家事の機械化や調理の簡素化などが進展しているにもかかわらず、日本の（家事を担っている）女性は、平均4時間以上も家事に費やしており、これは、他の先進・中進国（アルゼンチン、韓国、南アフリカ）の女性に比べても多い。

4. 考察

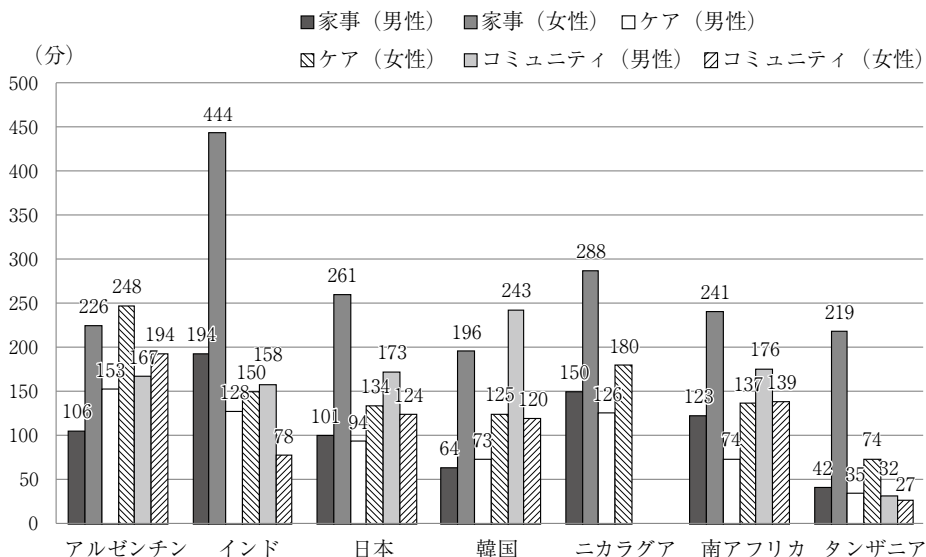
本稿は、国連社会開発研究所（UNRISD）の7カ国における時間調査の報告レポートのデータをもとに、家事労働や無償ケア労働に費やす時間という観点から日本の状況を観察したものである。本稿は、地域や文化やケアをつかさどる諸制度がまったく違う中、7カ国という限定的な国際比較で

あり、ここから、普遍的な知見を見出すことは困難であろう。しかし、本稿の分析から垣間見ることのできる示唆はいくつか存在する。

まず、女性と男性のSNA活動、家事・無償ケア労働を含む拡張SNA活動の分担に関する示唆である。男女別に、SNA活動と拡張SNA活動の従事率をみた分析(図1)からは、女性のSNA活動への進出度が高い国は、必ずしも、男性の拡張SNA活動の進出度が高いことを意味しないことがわかった。女性のSNA活動の進出が、男性の拡張SNA活動の参加によって補われているのではないのであれば、家庭内の拡張SNA活動はどのように賄われているのであろうか。ひとつの答えが、家事労働の機械化、ケア労働の外部化などによって、拡張SNA活動の短縮化が進展していることであろう。しかしながら、日本のケースを見ると、女性の拡張SNA活動の労働時間は、経済発展のわりには長く(図2、図3)、また、その内訳をみると、家事労働が多く、経済発展が家事労働の軽減をもたらしたかという点は甚だ疑問である

第二に、ケア労働については、日本は、他の6カ国に比べて、実際にケアに従事している割合が少なく、また、従事している人のケア労働時間もそれほど多くはない(図4、図6)。つまり、ケア労働が国民生活の中で比重を大きくしてきているとはいえ、他国に比べて、社会保障制度(例えば、完全看護の病院や、介護施設、障害者施設など)や保育・教育制度(保育所、幼稚園、公教育など)がある程度、日本のケア労働を請け負っていることを示唆しているのではないだろうか。しかし、これはもちろん平均の話であるので、一部のケアを担っている人(特に高齢者介護)が極端に長い長時間介護に従事している可能性は否めない。

第三に、日本の男女の時間行動の最も特異な点は、SNA活動に従事している人の労働時間がほかの国に比べて突出して高いことであろう。これは、特に男性に顕著であるが、女性にも見ることができる。この労働時間の長さが、女性も含め、家事や無償ケア労働に従事する人と、しない人の間の格差を生じさせている。一方で、日本の男性



出所: Budlender 2008, Fig. 6

図6 平均活動時間(活動者のみ): 家事, 無償ケア労働, 無償コミュニティ活動

の非生産活動時間（余暇時間）は7カ国中一番少なく、労働時間の短縮なしに、家事やケア労働への参加を求めることは難しいであろう。

注

- 1) なお、日本については田宮遊子氏（神戸学院大学准教授）、四方理人氏（慶應義塾大学先導研究センター研究員）が総務省統計局「社会生活基本調査」を用いて分析を行っている。
- 2) タンザニアの男女のSNA活動および拡張SNA活動の従事率が高い理由の一つは、タンザニアの時間調査が7日間の活動を記録した平均値であることと関係している。ほかの国は一日または二日の平均値を用いている。記録された日数が多くなると、各カテゴリーに参加した率が高くなる（Budlender 2008）。

- 3) この数値は総男性人口の平均なので、SNA活動に全く従事していない31%の男性も含めた平均であるが、これよりも大幅に長い10時間、12時間以上の労働時間も稀でないことはよく知られている。
- 4) これらはpassive care（消極的ケア労働）と名付けられている。

参考文献

- Budlender, Debbie (2008) "What do time use studies tell us about unpaid care work? Evidence from seven countries," UNRISD Research Paper.
- Tamiya, Y. and M. Shikata (2009) Research Report 2 Japan: Analysis of Time Use Surveys on Work and Care, Programme on Gender and Development UNRISD, Geneva.
- （あべ・あや 国立社会保障・人口問題研究所国際関係部第2室長）